

Title	W. A. Mozartの交響曲の時代区分に関する一考察：第一楽章の分析を中心に
Sub Title	The chronology Mozart's symphonies
Author	大野, 洋(Ono, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.26, (1968. 11) ,p.75- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00260001-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

W. A. Mozart の交響曲の時代区分に関する一考察

——第一章の分析を中心に——

大 野 洋

Wolfgang Amadeus Mozart へ一七五六年～一七九一年へは、その三五才の短い生涯のなかで、へ一七六四年～一七八八年へにかけて実に六一曲の多数の交響曲を作曲している。⁽¹⁾この小論に於て論者はへⅠへ楽章構成へⅡへ調構成へⅢへ第一章に於ける形式という三つの側面から W. A. Mozart の交響曲にスポットをあてて、その変遷を追ってみようと試みるものである。これまでに W. A. Mozart の交響曲についての研究は論者の調べが及んだ範囲では次の三種類の文献がとくに注目される。へ交響曲のみの変遷を取扱ったものへ⁽²⁾① Sain-Fox: The Mozart Symphony② Larsen: The Mozart Companion ③ Mozart の交響曲の中の Mozart の交響曲の項、上述の三人の著作者達による三種類の論文は、いづれも交響曲一曲、一曲を全体として扱っており、それを時代を追って論述している。この小論で論者が試みようとしている、ある特定の観点から作品の変遷をたどるという方法を用いてはいないので、論者はあえてこの方法で変遷をたどろうとするものである。以下三つの方法による分析を通じて W. A. Mozart の交響曲の時代区分をしていくのであるが、第一と第二の方法、すなわち楽章構成と調構成という面からみると、彼の交響曲には際立った時代区分がなく、時代

的な特長をみいだせなかった。そして第三の方法、すなわち第一章の構成からみるとはじめてここに時代区分が可能であり、後に述べるように五つの時期に分類されるのである。以下順を追って三つの観点からの考察をすすめていくことにする。

〈Ⅰ〉 楽章構成からみた時代区分

W. A. Mozart の交響曲の楽章構成は次の四種類のものがある。すなわち、一楽章構成、三楽章構成、四楽章構成、五楽章構成の四種類である。⁽⁵⁾ Ricordi 版全集によれば四六曲が集められているが、楽章構成別の曲数は次のようになっている。すなわち一楽章構成のもの 4 曲〈K. 161 u K. 163, K. 181, K. 318〉の三曲、三楽章構成のもの 14 曲〈K. 16, K. 19, K. 22, K. 45a, K. 74, K. 81, K. 84, K. 120, K. 128, K. 129, K. 162, K. 182, K. 184, K. 189, K. 297, K. 338, K. 504〉の十七曲、四楽章構成のもの 6 曲〈K. 43, K. 45, K. 48, K. 83, K. 83, K. 75, K. 96, K. 97, K. 110, K. 112, K. 114, K. 124, K. 130, K. 133, K. 134, K. 183, K. 200, K. 201, K. 202, K. 319, K. 385, K. 425, K. 543, K. 550, K. 551〉の二十五曲、五楽章構成のもの 6 曲〈K. 132〉の一曲、以上である。このことから明らかに三楽章構成のものと四楽章構成のものがほとんどであり、その他のものは、この二種類のものの合計の割弱である。それ故に一楽章構成のものと、五楽章構成のものはこの種の時代区分を試みるにあたって除外して考えてよいと思うので以下の論では除くことにする。

三楽章構成交響曲と四楽章構成交響曲を作曲年代的にみると各種のものはいつれの時代にも作曲されていて、例えば三楽章構成交響曲が何年から何年まで作曲されていて、四楽章構成交響曲が何年から何年までというような特徴となるものはみあたらないのである。このことからわかるように、楽章構成面から W. A. Mozart の交響曲の時代区分を試みるということはあまり意味のあることとは思われないのである。

〈Ⅱ〉 調構成からみた時代区分

(a) 三楽章構成交響曲の各楽章間に於ける調構成

三楽章構成交響曲の各楽章間に於ける調構成をみると次のような三種類に分類される。すなわち〈主調—平行短調—主調〉構成が、〈K. 16, K. 22, K. 14〉の三曲、〈主調—下屬調—主調〉構成が〈K. 19, K. 45a, K. 74, K. 81, K. 129, K. 162, K. 182, K. 297, K. 338, K. 504〉の十一曲、〈主調—屬調—主調〉構成が〈K. 84, K. 128, K. 199〉の三曲である。

ここで明らかになることは〈主調—下屬調—主調〉で構成されているものが一番数が多く、これを年代的に調べてみると、K. 19の作品は一七六五年にロンドンで作曲され、K. 504の作品は一七八六年にウィーンで作曲されているから、その作曲年代はほぼ一六六年間にわたり、これは W. A. Mozart が九才から三〇才にわたっていることになる。すなわち彼が三五才でその生涯をとじるまで、およそ全生涯にわたってこの種の構成のものを作曲したのである。この結果から W. A. Mozart の三楽章構成交響曲に関しては時代区分をすることは困難であろうと思われる。

(b) 四楽章構成交響曲の各楽章間に於ける調構成

四楽章構成交響曲の各楽章間に於ける調構成をみると次の様な五種類に分類される。

すなわち〈主調—屬調—主調—主調〉構成のものは、〈K. 43, K. 133, K. 202〉の三曲、〈主調—下屬調—主調—主調〉構成のものは、〈K. 45, K. 48, K. 73, K. 76, K. 97, K. 110, K. 112, K. 114, K. 124, K. 130, K. 201, K. 319, K. 385, K. 425, K. 543, K. 551〉の十七曲、〈主調—主調—下屬調—主調〉構成のものは、〈K. 75〉一曲、〈主調—主調—主調—主調〉構成のものは、〈K. 96〉の一曲、〈主調—平行調—主調—主調〉構成のものは、〈K. 183, K. 550〉の二曲となっている。ここであきらかなことは〈主調—下屬調—主調—主調〉という構成をとるものが数量的にいつても一番数が多く、又時代的にみても一七六八年〈K. 45〉から一七八八年〈K. 551〉までの二年間に及び、いづれの時代にかけても作曲されているということである。それ故にこの四楽章構成の交響曲に於ても、又時代的な区分ははっきりと決定できないのである。

(a) (b) の結果からに〈I〉於ける結論と同じく、この〈II〉の方法によっても時代区分ははっきりと表われてはこない。

〈Ⅲ〉 第一楽章の形式からみた時代区分

第一楽章の形式分析をするとき以下のようになる。

①は第一主題、②は第二主題、展は展開部を示す。

各主題の調性を示すのにはドイツ音名を使用、大文字は長調、小文字は短調をあらわす。

K. 16	①—②—①—①—②	C G
	Es B B C Es	
K. 19	①—②—②	
	D A D	
K. 22	①—②—②—①—②	K. 74
	B F F c f	G A G G
K. 43	①—②—展—②	
	F C F	K. 75
		①—②—①
K. 45	①—②—②	F F F
	D A D	
K. 45 a	①—①—展—①	K. 76
	G G C	①—①
K. 48	①—①—①	F C
	D A D	
K. 73	①—②	K. 81
		①—②—①
		D D D
		K. 84
		①—②—①—②
		D—A—D—D
		K. 95
		①—①
		D D
		K. 96
		①—①
		C C

K. 97	①—②	Es B Es As
	D h	
K. 110	①—②—①—展—①—②	K. 133 ①—②—展—①
	G D D G G	D A D
K. 112	①—②—展—①—②	K. 134 ①—②—展—①
	F G F C	A A E
K. 114	①—②—展—①—②	K. 161 ①—②—展—①
	A E A A	e 163 D A D
K. 120	①—②—展—①—②	K. 162 ①—②—展—②
	D A G D	C G C
K. 124	①—②—展—①	K. 181 ①—②
	G C G	D A
K. 128	①—②—展—①—②	K. 182 ①—②—①—②
	C G C C	B C B B
K. 129	①—②—展—①—②	K. 183 ①—②—①—②
	G D G G	g B g g
K. 130	①—②—展—①—②	K. 184 ①—②—①—②—①
	F C F F	Es B Es Es Es
K. 132	①—②—①—②	K. 199 ①—展—①
		G G

K. 200	①—②—展—①—②	C G C C
	C G C C	
K. 201	①—②—展—①—②	K. 385 ①—展—①
	A E A A	D D
K. 202	①—②—展—①—②	K. 425 序—①—②—展—①—②
	D A D D	C D C C
K. 297	①—②—①—②	K. 504 序—①—②—展—①—②
	D A D D	D A D D
K. 318	①—②	K. 543 序—①—②—展—①—②
	G D	Es B Es Es
K. 319	①—②—①—②	K. 550 ①—②—展—①—②
	B F B F	g B g G
K. 339	①—②—①—②	K. 551 ①—②—展—①—①
		C G C C

この第Ⅲ番目の分析方法を採用することによりかなり明確に W. A. Mozart の交響曲の変遷をたどることができる。すなわちこの分析では第一主題と第二主題のあり方、又展開部、終止の有無を抽出して図示し、へ終止に関してはすべての作品がその大小はあっても持っているので省略した。主題に関してはその調性を示した。先ず主題構成からみていくとへ呈示部—展開部—再現部—結尾部へといふいわゆるへソナタ形式への確立ということを一応の基準として時代区分をしてみるとおよそ次のようになる。すなわち第一期は一般に完成されたソナタ形式の図式を持たない時期である。へK. 16へK. 9へこの時代の作品は二曲の例外をのぞいてへK. 34, K. 45aへ展開部を持っていないのがその特徴である。又展開部をもつこの二曲も再現部に於て呈示部に於て示された第一、第二の二つの主題が両

方とも再現されていないで、どちらか一方へK. 43では第二主題、K. 45aでは第一主題のみへが再現しているにすぎない。第二期へK. 110～K. 132は〈呈示部—展開部—再現部—結尾部〉という図式のソナタ形式が確立された時代である。この中で〈K. 124, K. 133〉は例外である。K. 124は再現部に於て第一主題のみしか再現していないし、K. 133は展開部をもっていない。第三期へK. 133～K. 181は再現部で第一主題あるいは第二主題があらわれず、どちらか一方の主題しか再現されないのを特徴とする。ここではK. 181が例外で、この作品は第一主題と第二主題のみから構成されている。第四期へK. 182～K. 385は再びソナタ形式をとる時代である。しかしこの時期は五期にわたった時期の中では一番構成としても不安定である。なぜならば展開部をもたない作品が〈K. 182, K. 183, K. 184, K. 297, K. 318, K. 319, K. 338, K. 339〉の八曲もあり、K. 199とK. 385は呈示部と再現部に於て第一主題のみをもちっているにすぎず、又K. 318は第一主題、第二主題のみから構成されているのである。

第五期は最後の五曲の作品の時代である。すなわちこの中には〈K. 425, K. 504, K. 543, K. 550, K. 551〉の五曲が含まれる。この特徴はK. 425, K. 504, K. 543は序奏をもっているということである。これまでの作品でも数小節の序奏をもつ作品はあるのだが、この三曲のように大きな序奏をもつ作品はこれからはじめてである。以上五期にわたる W. A. Mozart の交響曲の創作時期を時代区分してみると、

第一期	〈K. 16～K. 97〉	一七六四年～一七七〇年
第二期	〈K. 110～K. 132〉	一七七一～一七七二年
第三期	〈K. 133～K. 181〉	一七七二年～一七七三年
第四期	〈K. 182～K. 385〉	一七七三年～一七八二年
第五期	〈K. 425～K. 551〉	一七八三年～一七八八年

の五つの時期にわけて考えることができる。これを W. A. Mozart の生涯からみると、第一期はロンドンで初めて交響曲作曲してから第一回イタリア旅行の途中のローマ滞在中まで、第二期は第三回イタリア旅行の終りまで、第三期は二回のウィーン旅行とザルツブ

ルクでの仕事をしていた時代、第四期はザルツブルクの大神父と決裂して故郷をはなれ、ウィーンに本居を移し活動をはじめた時代、そして第五期はK. 523のリンツを除いて、すべてウィーンでの晩年の作品である。

次に第一主題と第二主題間の調性の関係を調べてみるとほとんど全作品が「主調—属調」の関係を示している。故にこのことから時代的な区分を試みることはあまり意味のないことである。

以上「Ⅰ」→「Ⅱ」→「Ⅲ」の分析方法をもって W. A. Mozart の交響曲の時代区分を試みたのであるが、最後にこの方法論でいくとどうしても図式的なことからのみになってしまい、内容的時代区分が把握できないということを反省しないわけにはいかない。作品の外形にばかりとらわれてしまい、その技術面がどうしてもおろそかになってしまふのである。本論に於ては、試みとして上記三種類の分析によってその時代区分をしたのであるが次の段階の研究として例えば、展開部をただその作品に展開部があるという工合にとらえるのではなく、第一主題、第二主題がどのように展開されているかということをもみることにし、その側面から作品をみていきたいと思う。内容的なことから逆に本論の「Ⅲ」で試みた試論が証明されればよいのであるが、それは他日の研究にゆずることにしたい。

註1 Köchel 第七版の作品目録「Köchel Verzeichnis Der Werke W. A. Mozart」の交響曲の項によれば断片を含めて「Fragment」六一曲がのせられている。

- 2 この著作については本文研究第二十三号に筆者の書評がある。H. C. Robbins Landon & Donald Mitchell: The Mozart Companion: FABER G. DE Saint-Foix: The Symphony of Mozart: DOBSON
- 3 A. Einstein: Mozart His character, His work 浅井真男訳 白水社
- 4 新モーツァルト全集刊行中の為本論ではリコルディ版交響曲全集を使用した。
- 5